

松村 高夫

『労働貴族再訪』

— ヴィクトリア時代のフリント
ガラス製造工, 1850-80年 —

Takao Matsumura, *The Labour Aristocracy Revisited: The Victorian Flint Glass Makers 1850-80*, Manchester University Press, 1983, x+196 pp.

イギリス労働史研究における「労働貴族」研究の波は、19世紀末、エンゲルスが問題にしていらい、これまでに3回おしよせた。イギリスにプロレタリア革命がおきなかったことを説明するという問題意識に支えられた、エンゲルスからレーニンにうけつがれる「労働貴族」論の展開が、第1の波であったとすれば、第2の波は、1954年、ホブズボームが「19世紀ブリテンにおける労働貴族層」を発表したときにはじまる。ホブズボーム『働く人びと』(1964年、日本語訳『イギリス労働史研究』)、R. ハリソン『社会主義者以前』(1965年)と相次いで発表された1960年代半ばになって、第2の波は頂点に達した。労働者の生活水準や気質をめぐる19世紀第2四半期と第3四半期の断絶論争ともからみあいながら、「労働貴族」論は、「労働貴族」の「経済的次元」に関心をよせるホブズボームと、その「政治的次元」に関心をよせるハリソンによって新たな地平がきりひらかれた。

この第2の波の上に加って、1970年代の後半いらい第3の波がおしよせつつある。1976年にだされたR. Q. グレイ『ヴィクトリア時代のエディンバラにおける労働貴族』にはじまって、ソルフゼン、クロスィック、モアとつづいて、1983年、松村高夫『労働貴族再訪』が出版された。「労働貴族」を文化や生活、特定の地域社会や産業という文脈のなかで捉えようとする社会史的な問題意識と手法に支えられた「労働貴族」研究の第3の波がいままたかまっているのである。

本書は、『労働貴族再訪』という書名が示すように、第2の波いらい20年が過ぎて、あらたな次元と水準で「労働貴族」論が展開されようとしているのを強く意識したものであり、このたかまりの中からうみだされた諸成果のなかでもひととき大きな重みをもつものであった。

19世紀第3四半期のパーミンガムに近いスタウアブリッジという小さな町に住んだフリントガラス製造工たちが、歴史の草叢からひきだされてきて、その実像が、フリントガラス製造工場の現場において、組合において、地域社会において、微細に描きだされた。「若い日本の学者」松村氏が、英語と英語の資料を駆使して、このような成果を発表したのは「非常な功績である」と『タイムズ文芸付録』(1984年4月5日)の書評で、T. C. パーカーは書いた。200ページたらずの比較的コンパクトなこの本の中に、数量的に実証しながら「労働貴族」像を描きだすのに著者は、どれだけのエネルギーと情熱を注ぎこんだことか。この大きさに思いいたったとき、パーカーの賛辞のもつおもみは、倍加する。

本書を貫く主題は明快である。「社会のおよび産業的には、労働貴族は、多数の労働大衆から自らをきり離そうとした。しかし政治的には、それは労働諸階級全体の真の代弁者というポーズをとることが便利であると思うことがよくあった」(R. Harrison, *Before the Socialist*, London, 1965, p. 32)という、「労働貴族」についてのハリソンの命題を、19世紀第3四半期のフリントガラス製造工で立証することであった。この命題について、ハリソン自身は、労働者の「貴族」と「平民」の深い裂け目を立証することよりも、政治的に「労働貴族」が「労働諸階級全体の真の代弁者」となりえた状況に関心を集中したのたいして、著者は、むしろこの命題の前半部分に関心をよせ、分析を集中する。しかも、雇用の規則性と高賃金という点で「労働貴族」を特徴づけたホブズボームの「経済的次元」の分析を補充して、著者は熟練に応じた分業が行われる労働の現場に注目するのである。

19世紀第3四半期、高度な熟練を要する吹きフリントガラスの製品(タンブラーや足つきコップ、テーブル用品など)を生産するフリントガラス工業は、国内外の拡大する市場に支えられて、その「黄金時代」を迎えていた。こうしたフリントガラス工業界の事情を背景にして、フリントガラス製造工は、きびしい入職規制と昇進規制をてこにして、「労働貴族」制を確立していく。熱したガラス材料を口で吹いて形を作っていくフリントガラス製造作業は、4人1組の「チェアー」(作業組とでもいう)によって行われていた。著者は、この「チェアー」に「労働貴族」のよって立つ基盤をもとめ、その労働の過程を詳細に洗いだす。ガラス原料の溶解炉を取りまいて、「チェアー」の長である親方労働者が座るいすがおかれ、この労働者の仕事を助けて、サーヴァター(第1助手)、フットメーカー(第2助手、これには徒弟見習い期間の終

ったジャーニイマンと徒弟見習い中のもののがいた), そしてまだ入職をし徒弟になることを認められていない雑役工のテイカーインがそれぞれきめられた仕事をしていった。

高度な熟練と勘を必要とする吹きフロントガラスの製造は, その熟練と経験に応じた分業によって行われ, この分業の担い手たちがつくる身分的階層制が「チェアー」制といわれるものに確立していた。著者は, ガラス工場が保存していた賃金帳簿をもとに, 労働者のみごとな階層別賃金格差構造(親方労働者の賃金を1とすれば, サーヴァターは3分の2, フットメーカーは3分の1~4分の1, テイカーインは10分の1)を明らかにし, 平均的フロントガラス製造工のライフサイクル(平均12歳でテイカーインとして入職見習い工になり, 数年たつて相当のふるいにかけられて入職を認められたものは, 見習いフットメーカーになり, 7年間の見習い期間をおえて, 一人前のジャーニイマンになって, 組合に入会し, サーヴァターをへていすに座る労働者になっていく)と, 入職見習いから親方労働者へと昇進するにつれて上昇していく生活賃金曲線を明らかにした。

労働過程における分業をとおして, 「チェアー」は, 身分的階層制と賃金格差構造を作りだし, きびしい入職規制と昇進規制をとおして, 一方で「貴族」になるものと「平民」のままとどまる多くのものを「チェアー」制度の中にうみだし, 他方で「貴族」あるいは「貴族」になると見通しえたものには生涯に渡る賃金上昇と, 子どもへの職業の継承という特権(スタウアブリッジの教会の結婚登記簿から著者が立証するところによれば, 親から子どもへのフロントガラス製造工の職業の継承性は6割にも及んだ)を保障した。「チェアー」を正面にすえての著者の析出するこうした「労働貴族」制は, 労働史研究における社会史的方法によるみごとな成果であり, 同時にアナール派を中心としたいわゆる社会史研究者たちへの1つの批判であったと私は思う。かれらは民衆の生活の諸相を析出することに大きな関心をよせるが, 労働の現場における民衆像をしばしば欠落させがちであったからである。

こうした「チェアー」をよりどころにした「労働貴族」たちは, 「フロントガラス製造工友愛組合」をとおして, その「労働貴族」制を社会的なものにした。幅ひろい共済給付金と, 高い賃金や入職規制といったかれらの特権が侵害されそうになったときに示す強い団結心と闘争力を, 著者は, この組合の構造と政策の分析をとおして明らかにし, 同時に, 同じ工場で働くカット工組合

との「合同」を拒否する排他的な組合の姿をも明らかにしている。組合の内側における連帯と相互扶助, 外側にたいする排除と差別といった矛盾の構造が指摘されるのである。

フロントガラス製造工を, もっとひろがった地域社会においてみたらどうなるのか。著者は, グレイヤクロスィックが実証したのと同じやり方で, スタウアブリッジのフロントガラス製造工の家族関係, とりわけ結婚の家族関係を調べあげる。熟練労働者の家族と不熟練労働者の家族の社会的距離は大きかったこと, 結婚における職業関係は, 親子の職業継承関係よりはるかにルーズであったことが明らかにされ, 労働の現場で大きな裂け目をみせたフロントガラス製造工とカット工は, 地域社会の中では「労働貴族」として1つにみなされ, かれらは1860年代の選挙法改正運動にみられるように, 協力してリーダーシップをとり, 全労働階級の利害を代表して運動したことが明らかにされた。ハリスンの主張する「政治的には労働階級全体の真の代弁者」である「労働貴族」像が, ここに具体的に例証されるのである。

フロントガラス工業という特定のトレードに働く「労働貴族」が, 労働の現場-労働組合-地域社会という3つの異なる次元の社会でどのような姿をみせたか。著者は, 歴大な第1次資料を駆使して, 数量的実証性をもってこの問題にこたえたのであり, この点においてみごとな成功をおさめた。このことを強調した上で, しかし, 松村氏が刻みあげた「労働貴族」像は, 19世紀イギリス労働史の伝統にどのような意味をもったと, 著者はいいたいのか, ここのところがはっきりしない。著者は, 「労働貴族」のトレードにおける保守性と政治や社会における進歩性, トレードにおける「貴族」と「平民」の断絶と政治運動における連帯と階級的統一という, アンビヴァレントな態度の存在を指摘している。しかし著者は, この「労働貴族」の両面性について「コインのどちら側がより強くあらわれるかは, トレードの状況, 地域的変化, 時代, 労働者がまきこまれた問題といった複雑な要素によった」(168ページ)と結論を下し, あくまでこの「労働貴族」の両面性にたいして客観的で冷静な態度をとろうとしている。R. ハリスンは, 同じ「労働貴族」を, その政治運動における階級闘争のひろがりや階級意識の強さに大きな共感をよせて, イギリス労働史における「労働貴族」の「英雄時代」を描きだした。ハリスンにみられる対象への強い思い入れは, ここにはみられない。対象にたいして冷静で距離をおいた態度をとることで, 著者は, つよいハリスン批判を表明したのではないかとさ

え思える。

しかし問題は、すなわちハリスンの提起した問題をポジティブにかつ批判的に発展させるとすれば、この「労働貴族」のアンビヴァレントな態度を、それぞれの状況のなかで、その内部連関の構造を明らかにすることであったのではないか。労働の世界と政治の世界の分裂を指摘するだけでなく、この矛盾する両面の内部のダイナミックな連関を解きあかすことが必要である。そのかぎは、T. C. パーカーが批判している諸論点ともかさなるのだが、資本と賃労働の関係の分析、あるいは資本に対抗する労働組合の指導者たちの思想の構造の分析にあるのではないか。

このことと関連してもう1つつけ加えていえば、「労働貴族」は、国内の政治と国外の政治にたいしてアンビヴァレントな態度をとらなかつたのだろうかということが問題になる。フロントガラス工業の繁栄とも深くかかわっていた「世界市場」の問題にかれらはどうきりむすんだか。本書の守備範囲ではけっしてないのだが、高橋克嘉氏が提起するような「労働組合主義と世界市場=帝国主義との深いかかわり」という問題設定の中にかれらをおいてみるときどのような「労働貴族」像となるのだろうか。1880年代いご、フロントガラス工業の世界市場での地位が低下し、トレードの不況が深刻になったとき、労働の現場を基盤にすえたフロントガラス製造工の「労働貴族」制はどう変わり、かれらのアンビヴァレントな態度はどう変質していくのか、書評者の身勝手という特権を行使していえば、ここのところがしりたかった。

〔安川悦子〕

